

# 信仰の根を張るゆるぎないもの

大教会役員 出口浩和



気が付けば、私は三年前に五十歳を迎えました。この中には、私以上にこの道を行ってくださっている方々がたくさんおられますので、まだまだこれからではございますが、この五十年という年月を思うとき、教祖の五十年のひながたが頭に浮かびます。

ひとりで五十年というのは簡単ですが、振り返りますと、喜べることやつらいこと、いいことや悪いことなど、いろいろな出来事がありました。そして、教祖がお遣しくくださった五十年のひながたを思うとき、尊い道をお通りいただき、いまの結構な道をお付けくださったのだと、あらためて感じています。

教祖の生い立ち、皆さまもご承知の通りでございます。そして、教祖四十一歳の時、親神天理王命が天降られ、教祖は月日のやしろとなられました。

少しずつ教勢が盛んになっていきます。

『おふでさき』の中に

にち／＼に神の心のせきこみを

みないちれつハなんとをもてる (二号 6)

なに／＼もやまいいたみハさらになし

神のせきこみてびぎなるそや (二号 7)

せきこみもなにゆへなるとゆうならば

つとめのにんぢうほしい事から (二号 8)

このつとめなんの事やとをもてる

よろづたすけのもよふばかりを (二号 9)

とあります。すべての病気や痛みは、神様のせき込み、手引きであり、おつとめの人衆がほしい、おつとめをつとめてほしいとの思いからです。

このことは、教祖が現身を隠されるときにも大きくせき込まれますが、おつとめは本教において最も重要なことです。そのつとめの人衆がほしいということで、種々、身上にしるしをつけて、お引き寄せいただいているのです。

この大切なおつとめには、ただいまも共に唱和させていただきます。『みかぐらうた』がござります。この『みかぐらうた』は、天理教の三原典（『おふでさき』『みかぐらうた』『おさしづ』）の中でも、私たちにとって一番身近なものではないでしょうか。月次祭や朝夕のおつとめ、身上事情のたすかりを願うお願いづとめなど、『みかぐらうた』を唱和する機会は多くあります。

おつとめの中でも、特に身近なのは朝夕のおつとめです。なぜ、

この立教の元一日を通して、いつも考えることがあります。それは、夫である善兵衛様が親神様の思召に対して、最後まで拒み続けられたらということ。あり得ない話ですが、よく考えるのです。

当時、善兵衛様は、親族などさまさまな人からかなりの意見を受け、苦しんでおられたと思います。しかし、三日間にわたる神様とのやり取りの中で、どうしても受け入れなければならぬと思われたのでしよう。心を定め、「みきを差上げます」と答えられました。この一言で、私たちが結構に通らせていただいている、今日の道をお見せいただいているのではと感ずるのであります。

稿本「天理教教祖伝」を読ませていただくと、月日のやしろとなられて後、教祖は親神様の思召のまにまに、貧に落ち切られます。そして、母屋の取りこぼちが始まり、屋根の瓦を下ろし、高塀が取り払われます。

すべては親神様の思召からですが、人間から見れば、理解に苦しむ出来事でした。善兵衛様からすると、嫁いできた妻に好き勝手にされているという状況です。善兵衛様は考え抜いたうえ、憑き物ならば去ってほしいと、さまざま手段を取られます。神様と人間との狭間で、本当にご苦心くださったと思えます。

従順であった教祖が、天保九年十月二十六日を境に一変したのであります。月日のやしろとなられてからの日々を通して、善兵衛様の驚きは計り知れなかったと思います。しかし、そんな中を善兵衛様は、すべては神様の思召と受け取り、心を定められました。その結果、現在の道をお見せいただけているのです。

その後、「おびや許し」を道あけとして教えが四方へと広がり、朝と夕に、毎日おつとめをつとめるのでしょうか。

朝づとめでは、この体をお貸しいただいて暮らす一日の始めに、ご守護への感謝を申し上げ、ごあいさつをさせていただきます。また、夕づとめでは、結構にお連れ通りいただけた一日に感謝申し上げます。

『みかぐらうた』に「ようこそつとめについてきた これがたすけのもとだてや」（六下り目 四ツ）とあります。おつとめはたすけのもとだて、つまり、たすけの根本なのです。

何においても、基礎がしっかりしていないとゆらぎます。大教会の神殿の前にも大きな楠くすのこがありますが、根がしっかりと張られているので緑豊かな葉が茂っています。たすけの根本であるおつとめをつとめさせていただき、信仰の根を張らせていただくことで、私たちの信仰はゆるぎないものになるのです。

また、この世は、親神様の懐住まいとお聞かせいただきます。つまり、親神様の懐においていただき、ご守護を頂戴して毎日を暮らしているのです。ですから、朝夕のおつとめを通して、親神様・教祖にお礼を申し上げることが大切なのです。

つとめさいちがはんよふになあたら (十号 34)

天のあたゑもちがう事なし  
おつとめをしつかりつとめさせて  
おつとめをいただき、いま以上のご守護を頂戴できるように、皆さまと共にこれからも努めさせていただきます。

